

令和3年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第3号（7月予報）

令和3年6月29日 秋田県病害虫防除所

| | |
|---|---|
| <p>【内容】</p> <p>I. 予報の要点 II. 主要病害虫の向こう1か月の予報 III. 発生予報と防除対策 IV. 気象予報 V. 気象データ VI. 用語の説明</p> | <p>【問合せ先】</p> <p>秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251</p> |
| <p>【お知らせ】</p> <p>◇今回の予報対象期間は7月を主とします。次回の発表は令和3年7月30日の予定です。 ◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬の情報については、秋田県のホームページで確認してください。https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。http://www.famic.go.jp/ ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。http://www.e-komachi.jp/</p> | |

I. 予報の要点

| | |
|----------|---|
| 水 稲 | <p>葉いもちの全般発生開始期はやや早い、発生量はやや多いと予想されます。余り苗は直ちに処分し、余り苗や持ち込みからの伝染を確認した場合は速やかに防除してください。</p> <p>斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ）の発生時期はやや早く、発生量は多いと予想されます。本年は田面の露出した水田が多く雑草の多発が予想されるため、中・後期剤の使用にあたっては、ほ場の発生雑草の草種や生育程度を観察して、適切な薬剤を選択してください。</p> |
| 野菜 花き | <p>きゅうりの病害では、べと病、斑点細菌病が多いと予想されます。降雨が続く場合は、薬剤の散布間隔を短くしてください。</p> <p>トマトの病害では、灰色かび病が多い、葉かび病がやや多いと予想されます。発病前からの予防散布に努めてください。</p> <p>きくの病害では白さび病がやや多いと予想されます。予防散布に努め、発病葉は摘み取り、ほ場外で処分してください。</p> <p>降ひょう等により茎葉が損傷した場合は、病害予防のため、殺菌剤の散布を行ってください。</p> |
| 果 樹 | <p>果樹カメムシ類の発生は、りんご、なしのいずれもやや多いと予想されます。園地への飛来状況をよく観察し、飛来数が多い場合には薬剤を散布してください。</p> <p>ぶどうでは、灰色かび病が多いと予想されます。6月24日発表の防除対策情報第6号を参照し、防除を徹底してください。</p> <p>降ひょう等により、各品目で新梢や葉の損傷、花穂の折損や果実への傷が確認されています。損傷部位の撤去や殺菌剤の散布を行ってください。</p> |

Ⅱ. 主要病害虫の向こう 1 か月の予報

| 作目名 | 病害虫名 | 対象地域 | 発生時期 感染時期 | 発生量・感染量 | |
|----------------|------------------|------|--------------|---------|-------|
| | | | | 現況 | 予報 |
| 水 稲 | 葉いもち | 全県 | やや早い | — | やや多い |
| | 紋枯病 | 全県 | やや早い | — | やや少ない |
| | 稲こうじ病 | 全県 | やや早い | — | 平年並 |
| | 斑点米カメムシ類(第1世代成虫) | | | | |
| | アカスジカスミカメ | 全県 | やや早い | 多い | 多い |
| | アカヒゲホソミドリカスミカメ | | — | 平年並 | やや多い |
| | コバネイナゴ | 全県 | — | — | 多い |
| アワヨトウ(第1世代幼虫) | 全県 | — | — | やや少ない | |
| 大 豆 | ウコンノメイガ(第1世代幼虫) | 全県 | 平年並 | — | 平年並 |
| | 食葉性鱗翅目幼虫 | 全県 | — | — | やや少ない |
| ねぎ (夏どり) | さび病 | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | べと病 | 全県 | — | やや少ない | 平年並 |
| | アザミウマ類(ネギアザミウマ) | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | ネギハモグリバエ | 全県 | — | やや少ない | 少ない |
| きゅうり | べと病 | 全県 | — | 多い | 多い |
| | うどんこ病 | 全県 | — | 平年並 | やや多い |
| | 斑点細菌病 | 全県 | — | やや多い | 多い |
| | アブラムシ類(ワタアブラムシ) | 全県 | — | やや少ない | やや少ない |
| キャベツ (初夏どり) | コナガ | 全県 | — | やや少ない | やや少ない |
| | モンシロチョウ | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | ヨトウガ(第1世代) | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| トマト | 灰色かび病 | 全県 | — | 多い | 多い |
| | 葉かび病 | 全県 | — | 平年並 | やや多い |
| | ヒラズハナアザミウマ | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| えだまめ | べと病 | 全県 | — | 平年並 | やや多い |
| | ツメクサガ | 全県 | — | やや少ない | やや少ない |

| 作目名 | 病害虫名 | 対象地域 | 発生時期 感染時期 | 発生量・感染量 | |
|--------------------------------------|---|----------|--------------|---------|-------|
| | | | | 現況 | 予報 |
| きく | 白さび病 | 全県 | — | 平年並 | やや多い |
| | アブラムシ類 (ワタアブラムシ) | 全県 | — | やや少ない | やや少ない |
| | アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ) (ミカンキイロアザミウマ) | 全県 | — | — | 平年並 |
| | オオタバコガ | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| りんご | 斑点落葉病 | 全県 | — | やや多い | やや多い |
| | 黒星病 | 全県 | — | やや少ない | 平年並 |
| | 炭疽病 | 全県 | — | — | やや多い |
| | 輪紋病 | 全県 | — | — | やや多い |
| | 褐斑病 | 全県 | — | 平年並 | やや多い |
| | シンクイムシ類 (モモシンクイガ) | 全県 | — | — | やや多い |
| | ナミハダニ | 全県 | — | やや少ない | 平年並 |
| | リンゴハダニ | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | ハマキムシ類(第1世代) (リンゴコカクモンハマキ) (リンゴモンハマキ) | 全県 | — | 平年並 | 平年並 |
| | 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ) | 全県 | — | — | やや多い |
| | キンモンホソガ(第2世代) | 全県 | やや早い | 平年並 | やや多い |
| | なし (日本なし) | 黒星病 | 県北部・県中央部 | — | 平年並 |
| 黒斑病 | | 県北部・県中央部 | — | やや少ない | 平年並 |
| 輪紋病 | | 県北部・県中央部 | — | — | やや多い |
| シンクイムシ類 (モモシンクイガ) | | 県北部・県中央部 | — | — | やや多い |
| ナミハダニ | | 県北部・県中央部 | — | やや少ない | 平年並 |
| 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ) | | 県北部・県中央部 | — | — | やや多い |
| アブラムシ類 (キナギアブラムシ) | | 県北部・県中央部 | — | 平年並 | やや多い |
| ぶどう | べと病 | 県南部 | やや早い | 平年並 | やや多い |
| | 灰色かび病 | 県南部 | — | 多い | 多い |
| | 晩腐病 | 県南部 | — | 平年並 | やや多い |
| | チャノキイロアザミウマ | 県南部 | — | 平年並 | やや多い |
| 飼料作物 | アワヨトウ(第1世代幼虫) | 全県 | — | やや少ない | やや少ない |

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稻

| 病虫害名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------------|-----------|
| | 発生時期（全般発生開始期） | 発生量 |
| 1. 葉いもち | やや早い（前年並） | やや多い（前年並） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（-/+）。
- イ、BLASTAM法による感染好適判定（県内24アメダス地点）では、6月23日に5地点で感染に好適な気象が観測された（-/+）。
- ウ、各地域振興局の水稻定点調査によると、6月25日現在あきたこまちの葉数は8.9葉（平年差+0.3葉）だった（-/ ）。
- エ、6月4～5半旬の余り苗調査における発病地点率は、県北部16.7%（平年6.3%）で高い、県中央部4.4%（平年8.4%）でやや低い、県南部3.6%（平年3.3%）で平年並、全県平均は7.3%（平年6.3%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ほ場を巡回し、余り苗や本田での発病状況を確認する。生育が遅れているほ場では肥効が遅れ、7月以降稲体の窒素濃度が高まり、いもち病への抵抗力が低下するので特に注意する。
- イ、余り苗はいもち病の発病の有無にかかわらず、直ちに泥の中に埋めて処分する。発病地点率が高かった地域や、発病が確認されたほ場周辺では今後の発病状況に注意する。
- ウ、これまで葉いもち防除剤を使用していない場合は、直ちにオリゼメート粒剤を10a当たり2kg、又はルーチン粒剤を10a当たり1kgを散布する。
- エ、余り苗や持ち込みからの伝染を確認した場合は、直ちにブラシン剤又はノンブラス剤の茎葉散布を行う。その後、必要に応じてビーム剤を追加散布する。

| 病虫害名 | 予 報 内 容 | |
|--------|--------------|------------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 2. 紋枯病 | やや早い（前年より早い） | やや少ない（前年よりやや少ない） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（-/+）。
- イ、前年収穫期の発生量は少なかった（ /-）。
- ウ、各地域振興局の水稻定点調査によると、6月25日現在あきたこまちの葉数は8.9葉（平年差+0.3葉）、茎数は㎡当り388本（平年比94%）だった（-/-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期に茎葉散布剤で防除する。その際、薬剤が株元に到達するように散布する。
- イ、粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場や本病を対象とした育苗箱施用剤を使っていないほ場に限る。散布時期はモンガリット粒剤が出穂20～10日前、リンバー粒剤が出穂15～5日前である。
- ウ、粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しをしない。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|---------------|
| | 感 染 時 期 | 感 染 量 |
| 3. 稲こうじ病 | やや早い（－） | 平年並（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（－/+）。
- イ、各地域振興局の水稻定点調査によると、6月25日現在あきたこまちの葉数は8.9葉（平年差＋0.3葉）だった（－/ ）。
- ウ、前年収穫期の発生量はやや少なかった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、前年多発したほ場では出穂20～10日前に、ドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。
- イ、ドイツボルドーA、ボルドーは高濃度で散布すると薬害を生じやすい。
- ウ、Zボルドー粉剤DLは高温時には薬害を生じやすいので夕方に散布する。
- エ、粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しをしない。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--|----------------|----------------------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. 斑点米カメムシ類 （アカスジカスミカメ） （アカヒゲホソミドリカスミカメ） （第1世代成虫） | やや早い(前年並) － | 多い(前年より多い) やや多い(前年より多い) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（－/+）。
- イ、大仙市牧草地のすくい取り調査における、アカスジカスミカメ（越冬世代成虫）の初確認日は6月7日（平年6月6日）で平年並（±/ ））、アカヒゲホソミドリカスミカメ（第1世代成虫）の初確認日は6月25日だった。
- ウ、予察灯における6月4半旬までの誘殺数はアカスジカスミカメで多く（ /+）、アカヒゲホソミドリカスミカメで平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、水田内に雑草が多発すると、アカスジカスミカメの水田内への侵入が助長される。そのため中・後期除草剤の使用にあたっては、ほ場の発生草種や生育程度を観察して、適切な薬剤を選択する。
- イ、稲の出穂15～10日前までに農道や畦畔、休耕田等の草刈りを地域で一斉に行う。
- ウ、水田畦畔刈り込み剤を7月上～中旬に散布すると40～50日の抑草効果が期待できる。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-----------|---------|---------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 5. コバネイナゴ | － | 多い（前年並） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。
- イ、前年の発生量から、越冬量は多いと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、要防除密度は株当たり0.5頭以上（穂ばらみ期まで）であり、これは本田における20回のすくい取りの捕殺数で100頭以上に相当する。

イ、要防除密度に達したほ場では、若中齢期の7月上～下旬にトレボン剤又はMR. ジョーカー剤で畦畔を含めて防除する。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|------------------|------|------------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 6. アワヨトウ（第1世代幼虫） | — | やや少ない（前年よりやや少ない） |

(1) 予報の根拠

ア、6月4半旬までの糖蜜トラップにおける総誘殺数は平年並だった（L 飼料作物の項を参照）（ /± ）。

イ、6月4～5半旬の牧草地等巡回調査における第1世代幼虫はやや少なかった（L 飼料作物の項を参照）（ /- ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、本種は主にイネ科作物に被害を及ぼすため、小麦、牧草地等からの幼虫の移動、加害に注意する。特に、中干し時は水田内に侵入しやすいので、畦畔、農道法面の雑草に発生が見られたら湛水状態を保ち、侵入を防ぐ。また、群生相となった黒化型の幼虫が確認された場合は、直ちにスミチオン剤で防除する。

イ、本種は突発的に発生することがあるので、今後の予察情報に注意する。

7. その他病虫害の発生予報と防除対策

| 病虫害名 | 発生時期 | 発生量 | | 防除上注意すべき事項 |
|-------------------------------|------|-----|-------|--|
| | | 現況 | 予想 | |
| 褐色菌核病 | — | — | 平年並 | 前年収穫期における発生量は平年並だった。紋枯病との同時防除とする（モンセレン剤を除く）。 |
| ニカメイガ （2回発生地帯の 第1世代） | — | — | やや少ない | 大潟村のフェロモントラップにおける越冬世代成虫の誘殺数は、少ない～やや少なく推移している。 防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。 |
| コブノメイガ （第1世代） | — | — | 平年並 | 6月24日現在、飛来は確認されていない。 今後の予察情報に注意する。 |
| セジロウンカ | — | — | 平年並 | 6月23日現在、飛来は確認されていない。 防除適期は成虫飛来盛期の約3週間後のため、今後の予察情報に注意する。 |
| フタオビコヤガ （イネアオムシ） （第2世代） | — | 平年並 | 平年並 | 6月中旬の抽出ほ場調査における第1世代幼虫の発生量は平年並だった。 防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。 |

B 大豆

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|------------|-------------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. ウコンノメイガ | 平年並（前年より早い） | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（±/±）。

イ、予察灯における誘殺は、6月4半旬まで確認されていない（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、生育が旺盛なほ場で多発する傾向があるので注意する。

イ、7月6半旬にはほ場全体で40～60茎の葉巻数を調査して、茎当たり葉巻数が1.3個以上の場合には、8月上旬までにカスケード乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤、プレバソフロアブル5のいずれかを散布する。

ウ、発生源となる成虫は長距離移動による飛来・侵入が主であり、急激に発生量が増加する場合がありますので、今後の予察情報に注意する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-------------|---------|------------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. 食葉性鱗翅目幼虫 | — | やや少ない（前年よりやや少ない） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、6月中旬のえだまめの巡回調査におけるツメクサガの発生茎率は1.2%（平年7.8%）でやや低かった（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックフロアブルのいずれかを散布する。

イ、老齢期になると防除効果が劣るので、若齢期に散布する。

C ねぎ（夏どり）

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|--------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. さび病 | — | 平年並（前年より少ない） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は0.8%（平年1.0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早まるので、予防や発病初期の防除に努める。

イ、発病が多くなってからでは防除効果が劣るため、発病初期からアミスター20フロアブル、オンリーワンフロアブル、カナメフロアブル等を散布する。ただし、アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる薬害を生じる場合がありますので、散布間隔を2週間以上とる。

ウ、コハク酸脱水素酵素阻害剤（SDHI剤）、QoI剤（ストロビルリン系剤）、ステロール生合成阻害剤（EBI剤）は、耐性菌の出現を回避するため、連用は避ける。

エ、気温の上昇とともに病勢は衰えるが、病斑密度の高いほ場では、伝染源（夏孢子）が越夏し秋

期の発生要因になるので防除を徹底する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|---------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. ベと病 | — | 平年並（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年2.1%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早い。定期的に、ジマンダイセン水和剤等を散布し、予防に努める。

イ、発病初期からオロンディスウルトラSC、ベトファイター顆粒水和剤、リドミルゴールドMZ等を散布する。

ウ、フェニルアミド系剤、カルボン酸アミド剤（CAA剤）は、耐性菌の出現を回避するため、連用を避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--------------------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. アザミウマ類（ネギアザミウマ） | — | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、6月4半旬の巡回調査における食害株率は12.5%（平年10.0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アドマイヤー顆粒水和剤、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤、グレースシア乳剤、スピノエース顆粒水和剤、ダントツ水溶剤、ディアナSC、ファインセーブフロアブル等を茎葉散布、又はダントツ粒剤等を株元散布する。

イ、薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統薬剤の連用は避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-------------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. ネギハモグリバエ | — | 少ない（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /-）。

イ、6月4半旬の巡回調査における食害株率は1.7%（平年11.1%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤、グレースシア乳剤、ダイアジノン乳剤40、ディアナSC、ファインセーブフロアブル、リーフガード顆粒水和剤等を茎葉散布する。特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統（B系統）の発生が確認されているほ場では、防除を徹底する。

イ、薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統薬剤の連用は避ける。

5. その他病害虫の発生予報と防除対策

| 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | | 防除上注意すべき事項 |
|---------------------|------|-----|-----|---------------------|
| | | 現況 | 予想 | |
| アブラムシ類 (ネギアブラムシ) | — | 平年並 | 平年並 | 防除が必要な場合は少ないと見込まれる。 |

D きゅうり

| 病害虫名 | 予 報 内 容 | |
|--------|---------|-------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 1. ベと病 | — | 多い (前年より多い) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。
- イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は2.2% (平年0.5%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、敷きわら等を行い、雨による土のはね上がりを防ぐ。
- イ、発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ、定期的に薬剤を散布し、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。
- エ、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、ゾーベックエニベル、ベトファイター顆粒水和剤、ホライズンドライフロアブル、リドミルゴールドMZ等の治療効果がある薬剤を葉の表裏にかかるとように散布する。
- オ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。
- カ、耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤の連用を避ける。

| 病害虫名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|------------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 2. うどんこ病 | — | やや多い (前年よりやや少ない) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。
- イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は0% (平年0%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、トリフミン剤、パルミノ、ポリオキシシンAL水和剤、ポリベリン水和剤等の治療効果のある薬剤を葉の表裏にかかるとように散布する。
- イ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。
- ウ、耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤の連用を避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|--------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. 斑点細菌病 | － | 多い（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は4.2%（平年1.2%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、強風等により傷が付くと感染しやすくなるので防風対策を講じる。
- イ、ほ場の排水を改善する。また、過繁茂による通風不良や過剰施肥を避ける。
- ウ、発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- エ、有機銅剤、無機銅剤による予防散布に努める。ただし、銅水和剤は、茎葉を硬化させる場合があるので注意する。
- オ、降雨により発病が助長されるので、降雨が続く場合は薬剤の散布間隔を短くする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|------------------------|---------|------------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. アブラムシ類 (ワタアブラムシ) | － | やや少ない（前年よりやや少ない） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
- イ、6月4半旬の巡回調査における発生株率は11.1%（平年15.6%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ほ場周辺の除草を徹底する。
- イ、定期的に薬剤を散布する。ただし、薬剤抵抗性の出現を回避するため、異なる系統の薬剤をローテーションで散布する。
- ウ、ウイルスの伝染を阻止し、その後の増殖を抑制するために発生初期の防除を徹底する。

E キャベツ（初夏どり）

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. コナガ | － | やや少ない（-） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
- イ、秋田市予察ほにおける6月1～4半旬のフェロモントラップの誘殺数は232頭（平年179.1頭）で平年並だった（ /±）。
- ウ、6月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0.05頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、幼虫が見られる場合は、アフーム乳剤、グレーシア乳剤、コテツフロアブル、ディアナSC、フェニックス顆粒水和剤、プレバソフフロアブル5等を散布する。
- イ、収穫前日数に注意して、薬剤を選定する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|------------|---------|--------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. モンシロチョウ | － | 平年並（－） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、6月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除とする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------------|---------|--------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. ヨトウガ（第1世代） | － | 平年並（－） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、秋田市予察ほにおける6月1～4半旬のフェロモントラップの誘殺数は1頭（平年1.9頭）で平年並だった（ /±）。

ウ、6月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除とする。

F トマト

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|-------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. 灰色かび病 | － | 多い(－) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、6月中旬の巡回調査における発病株率は1.8%（平年0.4%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。

イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ、発病前からの予防散布に努める。ただし、ベンゾイミダゾール系剤、ジカルボキシイミド系剤の耐性菌が確認されているので、薬剤の選択に注意する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. 葉かび病 | － | やや多い(前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、6月中旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。
- イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ、発病前からの予防散布に努める。
- エ、耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤の連用を避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------------|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. ヒラズハナアザミウマ | — | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
- イ、北秋田市予察ほにおける6月3～4半旬の青色粘着板への誘殺数は43頭（平年45頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ハウス周辺の雑草地は発生源となるので除草に努める。
- イ、急増期（青色粘着板での10日当たり誘殺数がおおむね50頭/250cm²以上、かつ、誘殺数が前回誘殺数のおおむね5倍以上）を確認したら防除を開始する。
- ウ、スピノエース顆粒水和剤、バストガード水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤等を花房に付着するように丁寧に散布する。ただし、抵抗性の出現を回避するため、同一系統薬剤の連用を避ける。

4. その他病害虫の発生予報と防除対策

| 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | | 防除上注意すべき事項 |
|------|------|-----|-----|---------------------|
| | | 現況 | 予想 | |
| 疫病 | — | 平年並 | 平年並 | 防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。 |

G えだまめ

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. べと病 | — | やや多い（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、6月中旬の巡回調査における発病茎率は0%（平年8.5%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、汚損莢の防除において、1回散布では開花日から開花3日後散布の効果が高い。
- イ、フェスティバルC水和剤、ライメイフロアブル、ランマンフロアブル1,000倍、レーバスフロアブル2,000倍液のいずれかを散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|------------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. ツメクサガ | — | やや少ない（前年よりやや少ない） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
- イ、6月中旬の巡回調査における発生茎率は1.2%（平年7.8%）でやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、幼虫の発生初期にトレボン乳剤、フェニックスフロアブルを散布する。
- イ、老齢期になると防除効果が劣るので、若齢期に散布する。

H きく

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. 白さび病 | — | やや多い（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、6月中旬の巡回調査における発病葉率は0%（平年0.1%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病葉は摘み取り、ほ場外で処分する。
- イ、耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤の連用を避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|------------------------|---------|------------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. アブラムシ類 (ワタアブラムシ) | — | やや少ない（前年よりやや少ない） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
- イ、6月中旬の巡回調査における発生茎率は0.7%（平年4.3%）でやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ほ場周辺の雑草地は発生源となるので、除草に努める。
- イ、ウイルスの伝染を阻止し、その後の増殖を抑制するため、発生初期の防除を徹底する。
- ウ、薬剤抵抗性の出現を回避するため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--|---------|----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ) (ミカンキイロアザミウマ) | — | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における発生茎率は1.3%（平年0%）だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ハウス周辺の雑草地は発生源となるので、除草に努める。

イ、発生が見られたら茎葉散布を実施し、密度の低下を図る。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|-----------|------|----------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 4. オオタバコガ | — | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における発生茎率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

ウ、防除適期決定ほ（秋田市）における6月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は1頭（平年1.7頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、例年8月以降に被害が多くなるが、近年は、被害発生時期が早い傾向にあるので、発生初期の防除に努める。

I りんご

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|----------|------|-----------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 1. 斑点落葉病 | — | やや多い（前年よりやや少ない） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における発病葉率は0.08%（平年0.04%）でやや高く、発病地点率は31.8%（平年10.5%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

イ、高温・多雨の多発条件下では、ポリオキシシリン水和剤、ユニックス顆粒水和剤47、ロブラール水和剤のいずれかを主剤に加用して使用する。また、これらの薬剤は年1回の使用とする。ただし、ポリオキシシリン水和剤の効力低下がみられる園地では同剤を使用しない。

ウ、QoI剤（ストロビルリン系剤）は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

エ、ベフキノン水和剤、ベフラン液剤25は、千秋、玉林で果実色に障害が生じるおそれがあるので、7月中旬以降に使用する。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|--------|------|----------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 2. 黒星病 | — | 平年並（前年並） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、6月中旬の巡回調査における果そう葉の発病率は0.4%（平年1.1%）、発病地点率は4.5%（平年10.9%）でいずれもやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病葉、発病果実は見つけ次第摘み取り、焼却する。
- イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- ウ、黒星病の発生園では、Q o I 剤の使用を中止し、保護殺菌剤を10日間隔で散布する。
- エ、黒星病の未発生園では、Q o I 剤を使用できるが、必ず作用機作の異なる保護殺菌剤（ベルレート水和剤、有機銅剤等）を加用する。また、耐性菌出現を回避するため、年2回以内の使用を厳守する。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|--------|------|----------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 3. 炭疽病 | — | やや多い（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- イ、ニセアカシアは伝染源となるので、園地の近くにある木は伐採する。
- ウ、被害果は見つけ次第摘み取り、土中に埋める。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|--------|------|---------|
| | 感染時期 | 感染量 |
| 4. 輪紋病 | — | やや多い（—） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。
- イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|--------|------|----------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 5. 褐斑病 | — | やや多い（前年よりやや多い） |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、6月中旬の巡回調査における発病新梢率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- イ、多発が予想される場合は、7月中～下旬にトップジンM水和剤、ベンレート水和剤のいずれかを散布する。なお、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤は耐性菌の出現を回避するため、年1～2回の使用とし、必ず保護殺菌剤（オーソサイド水和剤80、有機銅剤など）を加用する。これらの効力が低下している園地では、ユニックス顆粒水和剤47に保護殺菌剤を加用して散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-------------------------|---------|------------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 6. シンクイムシ類 (モモシンクイガ) | — | やや多い (前年よりやや少ない) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、前年秋期の被害果率は高かった (/+)。

ウ、防除適期決定ほにおける6月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は19頭 (平年63頭) で少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、合成ピレスロイド剤を使用する場合の散布適期は、県北部が7月上～中旬、県中央部・県南部では7月上旬まで (未散布園の場合) とする。

ウ、スミチオン水和剤40、パーマチオン水和剤は薬害 (黄変落葉) が発生するおそれがあるので、高温時や衰弱樹には散布しない。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|---------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 7. ナミハダニ | — | 平年並 (前年より少ない) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、6月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0.001頭 (平年0.006頭) でやや少なく、発生地点率は4.6% (平年7.8%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生の多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤につき年1回使用、かつ作用点在同一の剤は年1回までの使用とする。

ウ、ダニオーテフロアブルを使用する場合は、防除効果の低下を避けるため、銅剤 (銅を含む製剤) を使用しない。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-----------|---------|-----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 8. リンゴハダニ | — | 平年並 (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、6月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0頭 (平年0頭) 、発生地点率は0% (平年0.6%) でいずれも平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤につき年1回使用、かつ作用点在同一の剤は年1回までの使用とする。

ウ、ダニオーテフロアブルを使用する場合は、防除効果の低下を避けるため、銅剤 (銅を含む製剤) を使用しない。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---|---------|-----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 9. ハマキムシ類 (第1世代) (リンゴコカクモンハマキ) (リンゴモンハマキ) | — | 平年並 (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、6月中旬の巡回調査における寄生新梢率は0% (平年0.1%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除剤はエクシレルSE、オリオン水和剤40、サムコルフロアブル10、ディアナWDG、テッパン液剤、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--|---------|------------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 10. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ) | — | やや多い (前年よりやや少ない) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、クサギカメムシの越冬量は平年並だった (/±)。

ウ、防除適期決定ほにおける6月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の総誘殺数は271頭 (平年199頭) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。

イ、園内への飛来が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤、MR. ジョーカー水和剤のいずれかを散布する。

ウ、スミチオン水和剤40は、薬害 (黄変落葉) が発生するおそれがあるので、高温時や衰弱樹には散布しない。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|--------------------|------------|-----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 11. キンモンホソガ (第2世代) | やや早い (前年並) | やや多い (前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (-/+)

イ、横手市予察ほのフェロモントラップにおける第1世代成虫の誘殺盛期は6月4半旬 (平年6月4半旬) で平年並だった (±/)。

ウ、6月中旬の巡回調査における被害葉率は0.2% (平年0.1%) で高く、発生地点率は13.6% (平年20.4%) でやや低かった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除適期は県北部で7月3～4半旬、県中央部・県南部は7月2～3半旬と見込まれる。

J なし（日本なし）

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 1. 黒星病 | — | やや多い（前年よりやや多い） |

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、6月中旬の巡回調査における果そう葉の発病葉率は0%（平年0.05%）でやや低かったが、新梢葉の発病葉率は0%（平年0.01%）及び発病果率は0.03%（平年0.05%）でいずれも平年並だった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、被害部位は除去し、園外へ搬出し処分する。

イ、防除剤の散布は10日間隔で行い、降雨が続くと予想される場合又は被害が発生している園地では散布間隔を7日とする。幸水は本病に弱いので特に注意して防除する。

ウ、有袋栽培の場合は、散布した防除剤が乾いたら速やかに袋かけを行う。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|---------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. 黒斑病 | — | 平年並（前年よりやや多い） |

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、6月中旬の巡回調査における果そう葉の発病葉率は0%（平年0.87%）、発病果率は0%（平年0.08%）でいずれもやや低かった（ /-）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、県内で栽培されている品種では、南水、八雲に発病が多い。

イ、不要な徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。

ウ、防除剤の散布は10日間隔で行い、降雨が続くと予想される場合又は被害が発生している園地では散布間隔を7日とする。。

エ、多発条件下では、ポリオキシシンAL水和剤を主剤に加用するか、ベルクガード水和剤又はポリキャプタン水和剤を散布する。ただし、耐性菌の出現を回避するため、ポリオキシシン剤の使用回数は年間3回以内とする。

オ、袋かけ前の防除を徹底し、散布した防除剤が乾いたら速やかに袋かけを行う。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|---------|
| | 感 染 時 期 | 感 染 量 |
| 3. 輪紋病 | — | やや多い（-） |

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。

イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合は散布間隔を7日とする。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|-------------------------|---------|-----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. シンクイムシ類 (モモシンクイガ) | — | やや多い (前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。
- イ、前年収穫期の被害果率から、越冬量は平年並と推定される (/±)。
- ウ、防除適期決定ほにおける6月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は32頭 (平年58頭) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。
- イ、合成ピレスロイド剤で防除する場合、県中央部の未散布園では7月上旬までに、県北部では7月上～中旬に散布する。
- ウ、モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害 (葉裏に黒色斑) を発生させるおそれがあるので、これらの品種に飛散しないようにする。
- エ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤のため、総使用回数に注意する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|-----------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 5. ナミハダニ | — | 平年並 (前年並) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。
- イ、6月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0頭 (平年0.01頭) でやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、不要な徒長枝は早めに剪去し、焼却する。
- イ、発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。
- ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は、1薬剤年1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の剤は、年1回の使用として、効力低下を防ぐ。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---|---------|-----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 6. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ) | — | やや多い (前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。
- イ、防除適期決定ほにおける6月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップの果樹カメムシ類の総誘殺数は208頭 (平年201頭) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、園内へのカメムシ類の飛来時期は年次変動が大きく、飛来数も場所によって異なることから、

飛来状況をよく観察して防除する。

イ、園内への飛来が多い場合は、ネオニコチノイド剤、有機リン剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤のため、総使用回数に注意する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------------------------|---------|------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 7. アブラムシ類 (ユキヤナギアブラムシ) | — | やや多い (前年並) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、6月中旬の巡回調査における発生新梢率は1.8% (平年1.8%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、シンクイムシ類及び果樹カメムシ類との同時防除に努める。

8. その他病害虫の発生予報と防除対策

| 病害虫名 | 発生時期 | 発生量 | | 防除上注意すべき事項 |
|--------|------|-----|-----|---------------------|
| | | 現況 | 予想 | |
| リンゴハダニ | — | 平年並 | 平年並 | 防除が必要な園地は少ないと見込まれる。 |

K ぶどう

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|--------------|-----------------|
| | 発 生 時 期 (初発) | 発 生 量 |
| 1. ベと病 | やや早い (前年並) | やや多い (前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (-/+)。

イ、6月中旬の巡回調査において、巨峰の発病葉率および発病花穂率は0% (平年0%) でいずれも平年並だった (/±)。

ウ、前年9月の発病葉率は平年並だった。 (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、予察ほにおける葉での平年初発確認日は7月25日である。

イ、発病が見られる場合は、7月中旬までに袋かけを行い、袋かけ後直ちに薬剤を散布する。

ウ、薬剤は、エトフィンフロアブル、コサイド3000、ジャストフィットフロアブル、フェスティバル水和剤、ベトファイター顆粒水和剤、ホライズンドライフロアブル、ムッシュボルドーDF、ライメイフロアブル、ランマンフロアブル、レーバスフロアブル、ICボルドー66D、Zボルドー又は4-4式ボルドー液のいずれかを散布する。

エ、ホライズンドライフロアブルは果粒が小豆大以降、フェスティバル水和剤、ベトファイター顆粒水和剤、ライメイフロアブル及びランマンフロアブルは大豆大以降の散布で、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、散布時期に注意する。なお、ボルドー剤は袋かけ後に使用する。

オ、ムッシュボルドーDF、Zボルドー及びコサイド3000は、薬害 (落葉) のおそれがあるので、クレフノン100倍を加用する。

カ、QoI剤、QiI剤、カルボン酸アミド剤又はシモキサニルを含む農薬およびエトフィンフロ

アブルは年間1～2回の使用とし、同一系統薬剤を連用しない。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------|---------|--------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 2. 灰色かび病 | — | 多い (前年よりも多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

イ、6月中旬の巡回調査における発病葉率は、キャンベル・アーリー0.2% (平年0.1%)、巨峰0.2% (平年0.0%) でいずれも高かった (/+)。発病花穂率は、キャンベル・アーリー0% (平年0.3%)、巨峰0% (平年0.6%) でいずれも平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、6月24日発表の防除対策情報第6号を参照する。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|---------|---------|-----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 3. 晩腐病 | — | やや多い (前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

イ、開花期巡回調査における発病花穂率はキャンベル・アーリー、巨峰ともに0% (平年0%) でいずれも平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病果房は摘み取り、焼却する。

イ、薬剤はオーソサイド水和剤80又はオンリーワンフロアブルとする。ただし、オーソサイド水和剤80の使用時期は収穫30日前までなので、散布時期に注意する。

ウ、笠かけや袋かけは薬剤の散布後7日以内に行い、7月中旬までには終える。やむを得ず7日以上空ける場合は、笠かけや袋かけの前に追加散布をする。

エ、耐性菌の出現を回避するため、オンリーワンフロアブルは年間使用回数を1～2回とし、連用を避ける。

| 病 害 虫 名 | 予 報 内 容 | |
|----------------|---------|-----------------|
| | 発 生 時 期 | 発 生 量 |
| 4. チャノキイロアザミウマ | — | やや多い (前年よりやや多い) |

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、6月中旬の巡回調査における被害花穂率は、キャンベル・アーリー、巨峰ともに0% (平年0%) でいずれも平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い場合は、エクシレルSEやスカウトフロアブル、ダントツ水溶剤、テッパン液剤、ディアナWDG、バイスロイドEW、モスピラン顆粒水溶剤等を散布する。

イ、ダントツ水溶剤は小豆大期以降、テッパン液剤、モスピラン顆粒水溶剤、バイスロイドEW、ディアナWDGは大豆大期以降の散布で、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、その前あるいは袋かけ以降に散布する。また、エクシレルSEは果実に薬斑や果粉溶脱を生じさせるおそれがあるので、袋かけ以降に使用する。

L 飼料作物

| 病虫害名 | 予報内容 | |
|------------------|------|------------------|
| | 発生時期 | 発生量 |
| 1. アワヨトウ（第1世代幼虫） | — | やや少ない（前年よりやや少ない） |

(1) 予報の根拠

ア、6月4半旬までの糖蜜トラップにおける総誘殺数は、能代市7頭（平年5.0頭）で平年並、由利本荘市0頭（平年1.9頭）でやや少なく、両地点の合計は7頭（平年7.5頭）で平年並だった（ / ± ）。

イ、6月4～5半旬の牧草地等巡回調査における第1世代幼虫は0.01頭/m²（平年0.24頭/m²）でやや少なかった（ / - ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除を必要とする牧草地は少ないと見込まれるが、群生相となった黒化型の幼虫が確認された場合は、スミチオン乳剤で防除する。牧草の刈り取りは、スミチオン乳剤散布後14日以降に行う。

イ、本種は突発的に発生することがあるので、今後の予察情報に注意する。

IV. 気象予報

令和3年6月24日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（6月26日～7月25日）

(1) 予報のポイント

- ・ 期間の前半は暖かい空気が流れ込みやすいため、向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。
- ・ 前線や湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、向こう1か月の降水量は平年並が多いでしょう。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

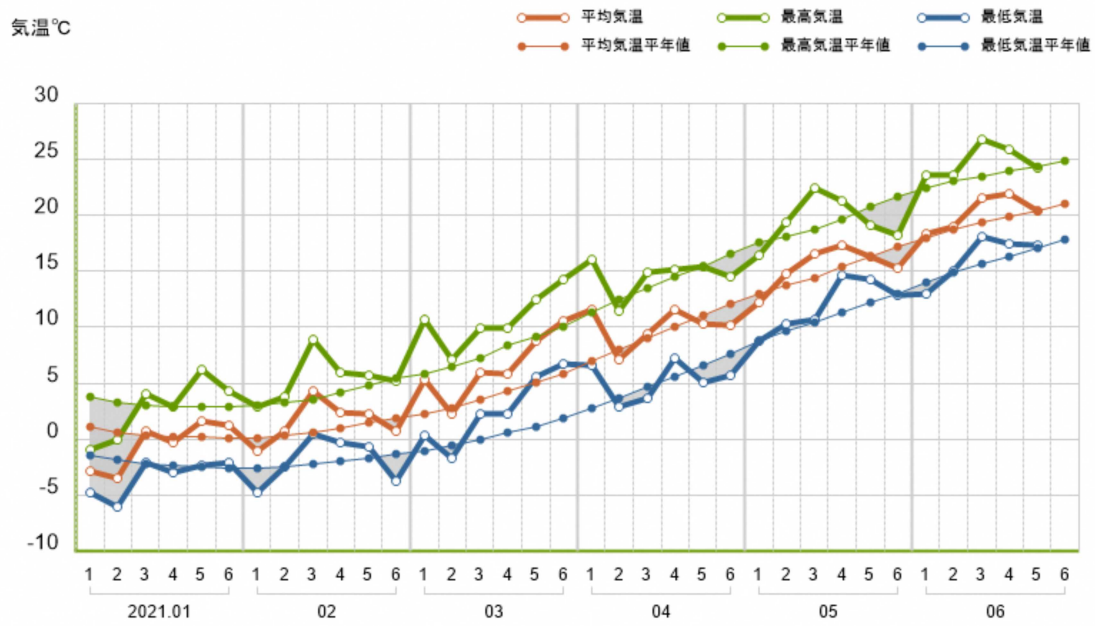
| | 低い（少ない） | 平年並 | 高い（多い） |
|------|---------|-----|--------|
| 気温 | 20% | 40% | 40% |
| 降水量 | 20% | 40% | 40% |
| 日照時間 | 40% | 30% | 30% |

(3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

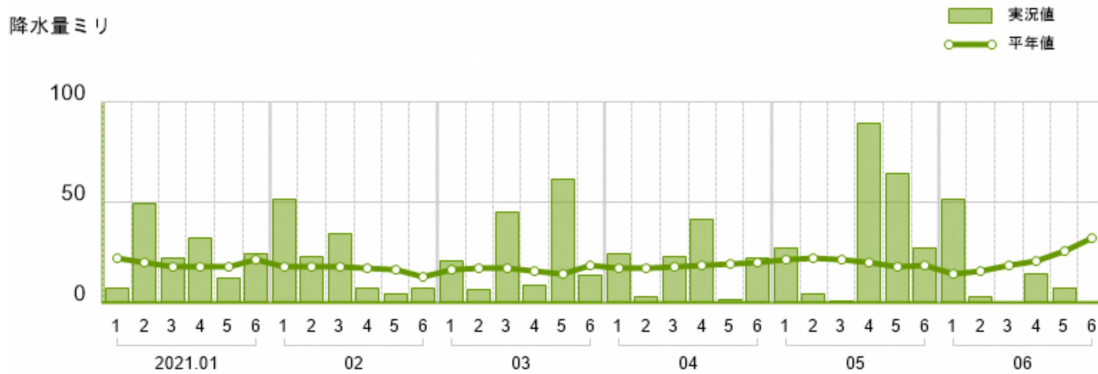
| | 低い | 平年並 | 高い |
|------------------|-----|-----|-----|
| 6/26～7/2（1週目） | 20% | 30% | 50% |
| 7/3～7/9（2週目） | 20% | 40% | 40% |
| 7/10～7/23（3～4週目） | 30% | 40% | 30% |

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～6月5半旬 秋田県農業気象システムより)

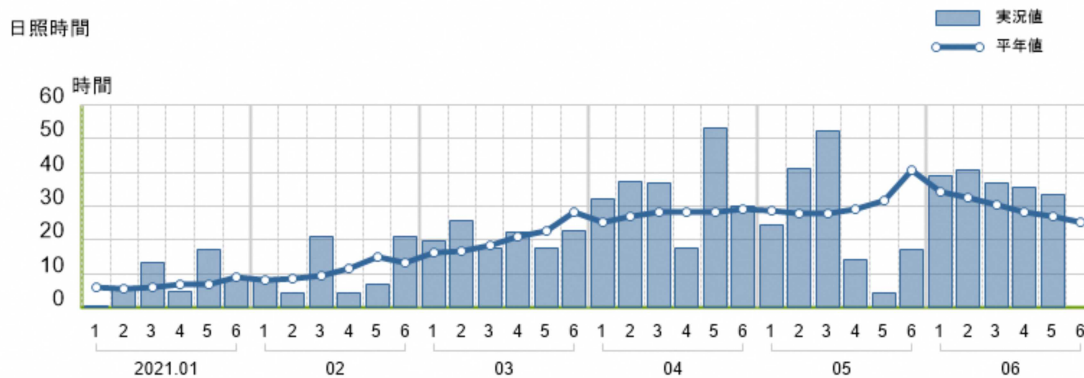
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

| | | | | | | | | | | | | | |
|----|-----|------|----|-----|----|----|-----------|------|----|----|----|----|-----|
| 日数 | ~-6 | -5 | -4 | -3 | -2 | -1 | 平年 発生日 | +1 | +2 | +3 | +4 | +5 | +6~ |
| 評価 | 早い | やや早い | | 平年並 | | | | やや遅い | | 遅い | | | |

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

| | | | | | | |
|----|----------|-------|-----|-----|------|-----|
| | 平年値 ↓ | | | | | |
| 度数 | 10% | 20% | 20% | 20% | 20% | 10% |
| 評価 | 少ない | やや少ない | 平年並 | | やや多い | 多い |

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

| 出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い)) | 解説 |
|----------------------------------|-------------|
| 高い(多い)確率が50%以上 | 高い(多い) |
| (20:40:40) | 平年並か高い(多い) |
| 平年並の確率が50%以上 | 平年並 |
| (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40) | ほぼ平年並 |
| (40:40:20) | 平年並か低い(少ない) |
| 低い(少ない)確率が50%以上 | 低い(少ない) |

半月のとり方

ここで扱われる「半月」とは暦日半月のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半月は1日から5日まで、2半月は6日から10日までであり、以降6半月まで5日ごとに該当する期間を指します。

**令和3年度秋田県農薬危害防止運動
～農薬を安全に正しく使いましょう！～**

6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

- 安全使用の基本事項
 - ・ 農薬の使用基準を遵守する。
 - ・ 病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
 - ・ 防除履歴を必ず記録する。

- 農薬使用上の注意
 - ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
 - ・ 家畜や蜜蜂などに影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類等を散布前に十分周知する。
 - ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
 - ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
 - ・ 農薬散布時の装備と体調は万全にする。

- 農薬の取扱い上の注意
 - ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
 - ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移し替えない。